

平沢計七ほか編。当時のたつたひとつの労働者のための報道機関紙。  
労働組合の大同団結を試みた、貴重な記録・全四〇号の合本復刻版！

# 労働週報

解説＝藤田富士男 推薦＝鎌田慧

全一巻

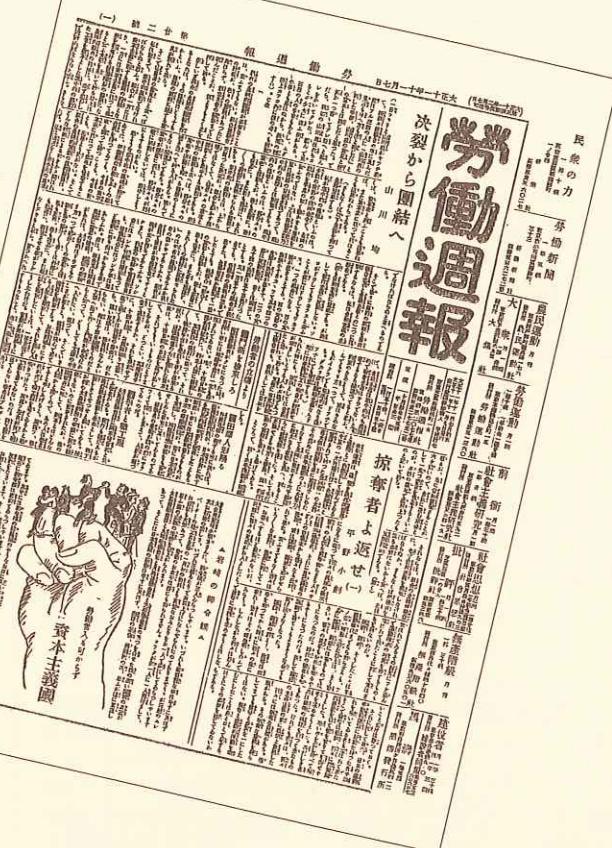
労働組合同盟会共同機関紙「一九二二年二月」～「一九二三年四月」  
B4判・上製・総二〇二ページ 解説・索引付き

定価(本体)一六、〇〇〇円(税)

●一九九八年一〇月復刻版刊行

ISBN4-8350-0538-4

## 労働週報



労働運動の共同戦線＝労組間の提携の機運の高まつた一九二二年に創刊された本紙は、各地の労働争議・小作争議をつぶさに報道するばかりでなく、水平社運動をはじめ女工の労働問題や産児制限問題、失業問題、朝鮮人労働者の問題など、底辺の労働者に関するあらゆる問題に紙面を割いた。荒畠寒村や堺利彦の「社会講談」が連載され、付録に堺や山川均らが経済学の講座を開くなど、読み物も興味深い。署名執筆者にはほかに山内みな・平野小剣・金鐘範・宮島資夫・山川菊栄・村島帰之など。のち一九二三年関東大震災直後に虐殺される平沢計七が、途中から編集常任を引き受け、アナとボルの提携による労働戦線の統一の道を探り、「自由討論」欄などを設けて紙面を両者に開放し、労働者が気軽に話せる雑談会を開くなど試みている。

この年の暮れに雑談会で呼びかけられた過激法案反対の運動は、「過激社会法案懇談会」として開花し、労働週報社は過激法案反対のセンターの様相を見せた。そしてこれをきっかけに労組の初めての大同団結が実現し、三悪法すべての上程が阻止されたのである。社会運動史・近代思想史研究に欠かせない貴重資料として復刻する。



# 時代の精神・鎌田慧

『労働週報』は、関東大震災（一九二三年九月）のさなか、軍隊によつて虐殺された平沢計七が編集していた。七五年前の労働者にむけた新聞である。

やはり関東大震災のどさくさにまぎれて、軍部に虐殺された大杉栄の『労働運動』や『労働新聞』は、すでに復刻されているのだが、このたびの『労働週報』の復刻によつて、ようやく、一九二〇年代初期、アナ・ボル両派が提携をめざしていたころの運動の全貌をみることができる。

このころの労働者の新聞を読むと、のびやかな運動のひろがりが感じられる。労働組合も横断的な組織だったから、いまの大企業の労組のように、官僚化し、欺瞞的なものではなかつた。

「水平社」運動への共感、障害者、失業者との連帯、世界の労働運動への関心、記事には労働者の顔がみえている。「知識人」の役割も大きかつた。労働者が政府の弾圧をものともせず、労働者の権利の拡張のために身体を張つてたたかっていた時代、その時代の精神がこの新聞に横溢している。

（かまた・さとし ルポライター）

（日正一月廿三日正月二年可認便郵三第） (四)

## 講談鑄掛松の話

堺 利彦

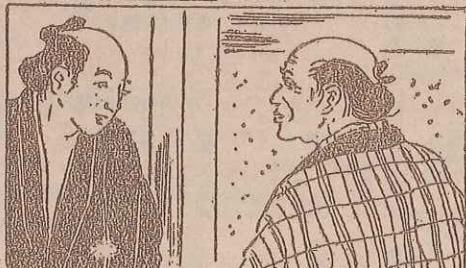


四 欲しいのは只だ  
金だ

「大家さん、マア聞いておくんなさい。ゆうへ俺が行つてあれほど頼んだのに、玄龜の畜生、とうとう來やがらねえ。小学校も表の戸を叩かせやがつて、ヤツトの事で起きたかと思や。ヤレ雪が降るの寒いのと抜かしやがつて、雪の晩、然し松五郎は之ていよ／＼本當の病人が出来ねえと極つてやしめえし、人を馬鹿にするにも禮があら、ねえ大家さん、體者なんて窮屈な病入のお蔭で食てるんだやし、俺アいめいましくて仕様がねえか。そりや俺の内は貧乏に極つてゐるさ。だけど大家さん、俺たつて裏代を拂はねえと云やしめいし、どうう親に薬一服のませねえで殺しちやつた。大家さん俺ア本當に拘る。」

「それで何かい松さん、玄龜さんはどうしてもおめえの内に見舞に來るのは厭だつていのかい。」

「ナニ、そうでもねえ、まさかそうは云はねいやな。だけど何のかと勿體わづけて、ぐずつか／＼やつてゐる中に、又一つ外から迎へが來たアね。それが本石町の松坂屋さんだつたら堪らねえ。玄龜が出生、二つ返事で突きつて行きやがつた。歸りにお前の内にも廻つてやるよなんかと抜かしやがつて大人らしくなつて來た。格好なり心持なり總てが急にとく／＼それつきりスッポかしされア大家さん拘しくて仕様がねえ、松坂屋さんは名代の異邦は親父の廻した一張羅を引つか



不二出版(株)

〒113-0023

東京都文京区向丘1・2・12

電話03-3812-4433

ファクシミリ03-3812-4464

振替00160-2-94084

1998-9